

# 今週の本棚

中村 達也 評

## 経済成長なき社会発展は可能か？

セルジュ・ラトゥーシユ著(作品社・2940円)

洋の東西を問わず、戦後世界をリードしてきた理念の一つが「成長」だったし、北から南への働きかけをリードしてきた理念の一つが「開発」だった。その開発と成長に根源的な問い直しを試みた作品。日本ではあまり知られていないラトゥーシユの全貌を知ることができるのを、まずは歓迎したい。イリイチやゴルツ、あるいはジョージ・エスケイレゲン等々、日本でも馴染みの深い思想家たちを架構するその一方で、アフリカやアジアでの自律社会を守る運動に身を投じてきた。そんな中で生ま

れた、開発と成長をめぐる批判と提言。キーワードは「ポスト開発」と「脱成長」だ。まずは「ポスト開発」。今にして

済成長の諸段階」で、いっそう明確に、アメリカを頂点とする成長への道筋を示したのは周知のこと。しかし現在、もしも世界中の人々がアメリカと同程度の消費生活をするとなれば、それを賄うための資源・環境は、おおよそ地球六個分にも相当するということ。もちろんそんなことは不可能だし、人間の経済活動がすでに地球の負荷能力を超えていることは、ローマ・クラブが繰り返し指摘してきたところだ。「有限な世界で無限の成長が可能と信じているのは狂人か経済学者だ」と、異端の経済

学者ポールディングも語っていた。ラトゥーシユは、ザイルとラオスで開発の現場に立ち会った経験を持つ。そこで彼が見たのは、北が主導する開発戦略が低開発と貧困を払拭するところか、むしろ地域に根ざした幾層ものインフォーマルな関係を引き裂き人々の自律的な生き方を脅かして、かえって新しい貧困を引き寄せてしまう現実であった。地域の伝統と文化に根ざした自律的な暮らしを基盤にした途を目指す「ポスト開発」を強調するののもそのためだ。

次に、「脱成長」。南の開発と相対的に北の世界を覆ってきた経済成長に対する問い直しだが、様々な形でくり上げられてきた。例えば、「環境と開発に関する世界委員会」による「持続可能な発展」の提唱。しかしラトゥーシユは、この「持続可能な発展」に対しても実に手厳しい。なぜなら、「持続可能な」という形容がついてはいるが、発展・開発・成長を前提とした発想であることに変わりはないというのだ。ゼロ成長論やマイナス成長論についても同様だ。発展・開発・成長という思

考様式と生活様式そのものを組み替える「脱成長」こそ目指すべきだ、と。

様々な提案が示されている。例えば、労働時間を短縮しつつすべての人が労働に参加するワークシェアリング。労働時間の短縮による自由時間の確保は、「より少なく働きより良く生きる」ゴルツ的な発想。財やサービスを「消費」することを軸にした暮らしではなく、自然や社会や歴史の恵みを「享受」する暮らし。地域に根づいたインフォーマルで自律的な人間関係の中での「共働」は、いわばイリイチ的な発想。そして、経済活動をエントロピー論的な不可逆なプロセスの中で位置づけて、環境と資源の新たな意味を問うのはジョージ・エスケイレゲンの発想。開発と成長を巡る言説の数々を架構して、壮大な一枚のパノラマ図として描いてみせて実に壮観。でもその分、いささか焦点がぼけてしまったのが残念。

(中野佳裕訳)

## 「ポスト開発」と「脱成長」のパノラマ

日聞(H22)5  
毎新(H22)9.10

思えば、世界的な規模で開発戦略の幕が切って落とされたその節目は、一九四九年のトルーマン演説であった。アメリカを除く世界の大半を低開発地域と形容し、開発戦略によって低開発状態と貧困からの脱出を打ち出した。その後、ロストウが「経

済成長の諸段階」で、いっそう明確に、アメリカを頂点とする成長への道筋を示したのは周知のこと。しかし現在、もしも世界中の人々がアメリカと同程度の消費生活をするとなれば、それを賄うための資源・環境は、おおよそ地球六個分にも相当するということ。もちろんそんなことは不可能だし、人間の経済活動がすでに地球の負荷能力を超えていることは、ローマ・クラブが繰り返し指摘してきたところだ。「有限な世界で無限の成長が可能と信じているのは狂人か経済学者だ」と、異端の経済

学者ポールディングも語っていた。ラトゥーシユは、ザイルとラオスで開発の現場に立ち会った経験を持つ。そこで彼が見たのは、北が主導する開発戦略が低開発と貧困を払拭するところか、むしろ地域に根ざした幾層ものインフォーマルな関係を引き裂き人々の自律的な生き方を脅かして、かえって新しい貧困を引き寄せてしまう現実であった。地域の伝統と文化に根ざした自律的な暮らしを基盤にした途を目指す「ポスト開発」を強調するののもそのためだ。

次に、「脱成長」。南の開発と相対的に北の世界を覆ってきた経済成長に対する問い直しだが、様々な形でくり上げられてきた。例えば、「環境と開発に関する世界委員会」による「持続可能な発展」の提唱。しかしラトゥーシユは、この「持続可能な発展」に対しても実に手厳しい。なぜなら、「持続可能な」という形容がついてはいるが、発展・開発・成長を前提とした発想であることに変わりはないというのだ。ゼロ成長論やマイナス成長論についても同様だ。発展・開発・成長という思

考様式と生活様式そのものを組み替える「脱成長」こそ目指すべきだ、と。

様々な提案が示されている。例えば、労働時間を短縮しつつすべての人が労働に参加するワークシェアリング。労働時間の短縮による自由時間の確保は、「より少なく働きより良く生きる」ゴルツ的な発想。財やサービスを「消費」することを軸にした暮らしではなく、自然や社会や歴史の恵みを「享受」する暮らし。地域に根づいたインフォーマルで自律的な人間関係の中での「共働」は、いわばイリイチ的な発想。そして、経済活動をエントロピー論的な不可逆なプロセスの中で位置づけて、環境と資源の新たな意味を問うのはジョージ・エスケイレゲンの発想。開発と成長を巡る言説の数々を架構して、壮大な一枚のパノラマ図として描いてみせて実に壮観。でもその分、いささか焦点がぼけてしまったのが残念。

(中野佳裕訳)